

支部便り

平成22年12月みつわ会東北支部

物忘れするといはれて茗荷汁 圭舟

気温が上がったり下がったりで体調を整えるのが大変ですが、そのせいで今年の紅葉が鮮やかでした。向寒の折、ご老体をご自愛下され度。

また今年も師走を迎えます。何だか訳の分からない世の中にあっても、とにかく今年も無事に過ごせた事を喜んでいいのか、このままでいいのか、迷うところではあります。

それは兎も角として、「高齢」の忘年会は「恒例」通り無事に行えそうです。今年の会場は下記のとおりですが、“せんこま”という福島のおいしい地酒が出る店で、菊池君の勤め先の専務さんが経営する店だそうです。一度味わってみてください。

ゴルフの方はその後進歩が無いとみえて、こここのところ忘年会を兼ねた反省会がありませんが、久しぶりに一人ずつ嘆いてみてください。ゴルフに見放された向は、最近思う事なんぞをゴルファーと同じく3分スピーチ位で披露してみても如何。とにかく賑やかに今年を締めましょう。



酒房「千駒」

広瀬通り方面から市役所方面を望む

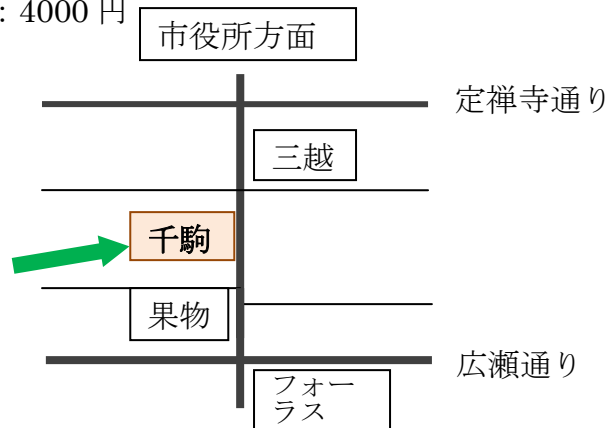
{平成22年みつわ会東北支部忘年会案内}

△日時：平成22年12月16日（木）午後6時～

△会場：「千駒」仙台市青葉区一番丁4丁目4-27

☎022-261-3466

△会費：4000円



{12月の行事}

	支部	みちのく損保
12月3日（金）		「食のアトリエ」
7日（火）		幹事会、忘年会「樽」
16日（木）	忘年会「千駒」6時※	

▲今年度会費 2000円送金を失念されている方、振替用紙同封しましたので・・・ネ！

※出席の連絡を12月10日（金）までに友彦さんか、業務伊藤さんに。

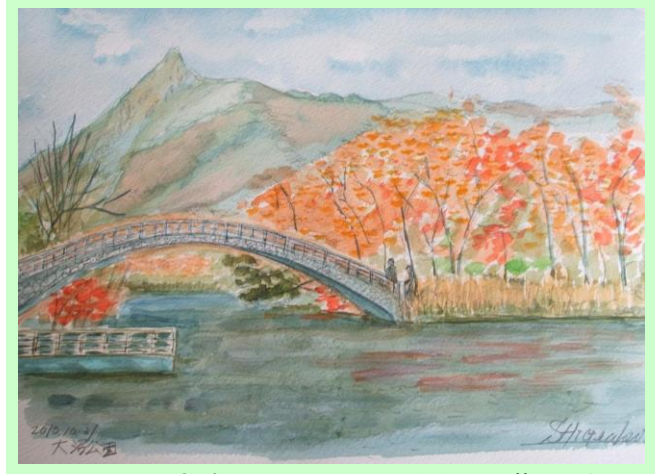
「心の故郷函館」 千葉繁明

「晩年の母は惚けてポツリ云ふ
訃報報せる従兄弟の電話」 繁明

独り居の母親を気遣って自宅に引き取り共に暮らしていた従兄弟から訃報を報せる電話があったのは昨年の事である。

私の父の妹である伯母は、函館で生まれ育ち独りになってからも函館の家を離れることなく、季節毎に函館の旬の味を私達に送ってくれていた。函館を離れ東京で暮らす事になってもいつも函館の思い出を懐かしんでいたのであろう。従兄弟から母親の一周忌を故郷の函館で営みたいとの報せがあり久し振りに晩秋の函館を訪れた。私には、ハイカラでエキゾチックで街の中を電車が走っている、そんな両親の故郷函館の街には小さい時からとても懐かしい思い出があり「心のふるさと」となっているのである。

函館では函館山の中腹に建っている伯父の家をよく訪れた。伯父は函館の街を描き続けた当時としては珍しいプロの画家である。津軽海峡を望むアトリエで黙々とキャンバスに向っている後姿は心に焼き付いている。時には、画業の傍ら、短歌を詠み随想を綴っては伯母に読み聞かせている姿はとても美しいものであった。私は父の年に近づきつつあるこの頃、こんな函館の想いが蘇ってくるのは、今の私は余生の楽しみを、絵を描き短歌を詠むことを生きがいに行っているからかもしれない。父が遺してくれた短歌誌「北海道アララギ」の表紙を飾っているのは伯父の絵であり、函館を離れていた父は同じアララギの「群山」に短歌を投稿し、これらに掲載されている歌や随想は私の心の支えになっているのである。伯父のアトリエの近く、海峡



を見下ろす岬には石川啄木の墓があり、又直ぐ近くには「わがいのちこの海峡の浪の間に消ゆる日を想ふ岬に立ちて」砂山影二と書かれた歌碑が建っている。この歌人は大正十年に青函連絡船から身を投じ二十歳の命を絶っているのである。父や伯父も海峡を見下ろすこんな風景を見、歌人たちの歌を読んでいたから短歌の道に入ったのかもしれない。父が書いた随想に「北海のかつら」と題して大正時代の卒業式の思い出を綴った一文がある。「卒業式には男女共に紋付袴をはいて出席するのが当たり前でその卒業式はきまって三月二十四日である。春近い函館は雪解けのぬかる名物の悪路つづきでせっかくの晴れ着をぬらしてしまった思い出もある。近づく春の気配は空の青さの中に輝いて、この日は卒業を祝うかの様にやわらかい風が吹いたものである。“朝な夕なに怠らず、わけし山路の甲斐ありて、今日ぞ祈る日の足る日なり、外山のかつら一枝を”と私たちは卒業式の歌を唄って校門に別れを告げた。」

こんな出だしで始まり最後には、「そして思い出をなつかしくよみがえらせる日こそ美しいだろうと思う。」と結ばれている。(かつらは成功の木のこと)